
ヒナアフター

D a i s y K a t s u r a

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ヒナアフター

【Nコード】

N7919D

【作者名】

Daisy Katsura

【あらすじ】

ハヤテとヒナギクの間に生まれた不良娘の綾崎心。彼女は自分が通ってる潮見高校で男子生徒に恋人と奴隷の座を懸けた挑戦状を叩き付けられ、受ける事にするが・・・。

第01話：座を懸けた挑戦状（前書き）

この物語は、「僕がヒナギクさんでヒナギクさんが僕で」の続編に当たります。心を主人公に物語が進行して行きます。最後までお楽しみ下さい。

第01話：座を懸けた挑戦状

ハヤテとヒナギクの間に子どもが生まれて十数年。

その子ども、綾崎^{あやさき} 心も大きくなつた。

髪は水色で顔がヒナギクそっくりである。例えて言うなら、髪を水色に染めた高校生時代のヒナギクだ。

その彼女は今、潮見高校に通っている。

当初、ヒナギクは心を白皇学院に通わせるつもりだったが、金銭的な問題と本人の強い希望により潮見に通わせる事にした。

と言うのは立前で、本当は心が手の施しようが無いまでに荒れてしまった不良の為、白皇は受け入れてくれず、仕方なくハヤテが通っていた潮見に入学させたのである。

ある日のお昼休み。潮見高校の校門を一人の女子生徒が、閉まっていた門を破壊して通過した。

髪は水色。背中に正宗を背負っている。

この女子生徒の名前が綾崎 心である事は、最早言つまでも無い。「綾崎さん、おはよう御座います」

と、校庭で遊んでいた数人の男子生徒が心の下に集まって来て頭を下げた。

「失せる」

心がそう言つて睨み付けると、男子生徒たちは慌ててその場を離れて行つた。

と思いきや、一人だけそこに残つた。

「あの、綾崎さん」

そいつは怯えながら声を掛けた。

その様子を離れた所で見ている先程の奴らは「何やってるんだあいつ？」と首を傾げる。

心は目の前で震えてる男子生徒に「邪魔だ」と言っただけで無理矢理横に退かして進む。

しかし男子生徒が直ぐに腕を掴んで引き留めた。

「何だよ？」

心は呆れ顔で振り向き訊ねる。

「僕と、付き合って下さい！」

男子生徒は腕を放すとそう言っただけで頭を下げた。

「はあ？」

「僕、始めて綾崎さんを見た時から、ずっと好きでした！綾崎さんが良ければ、僕と付き合ってください！」

ガスン！

心は男子生徒をぶん殴った。

「うわっ！」

男子生徒は尻餅を着く。

「いきなり何するんですか!？」

その言葉に心は肩を竦める。

「私はな、強い奴にしか興味は無いんだ。諦める。じゃあな」

心はそう言っただけで踵を返すと、昇降口に向かって歩き出す。

その背後で男子生徒が立ち上がって「待ってください!」と叫ぶ。

「ああ？」

心は振り向いて睨む。

「ほ、放課後、剣道部の部室で待ってます!」

「剣道? お前、剣道で私に勝って彼女しようってのか? 悪いが

辞めとけ。お前じゃ勝てない」

「そんなのやってみなきゃ分かんないじゃないですか!」

「そうだな。解った。放課後、その勝負受けよう。但し、私が勝つ

たらお前は奴隷な」

心はそう言っただけで行った。

すると、男子生徒の下に先程の奴らがやって来た。

「お前、良いのかよ? 敗けたら奴隷だぞ」

「自信あるから大丈夫。何たって僕は剣道部の部長だから」
てな訳で、時間を飛ばして放課後の剣道部部室。

心は竹刀を持って、竹刀を持った男子生徒と対峙していた。

「勝負の前にお前の名を訊いておこつ」

「僕？ 東宮^{あずまみや} 正太郎です」

（東宮？ 何か何処かで聞いた事あるような……。まあ良いか）

「よし、それじゃ始めようか」

「ハンデをあげます。そちらから掛かって来て下さい」

言つて正太郎は満面の笑みを浮かべる。

「自信過剰だな。それが命取りにならない事を願つてろ」

言つて心は駆け、正太郎の面を狙つた。

しかし竹刀は、正太郎の体を透過し、同時に正太郎の姿が消えて背後に現れた。

（残像拳だと！？）

説明しよう。残像拳とは、目にも留まらぬ速度で移動し、相手に残像を見せて恰かもそこに存在するかの様に感じさせる回避技である。

「貰つたあ！」

正太郎が竹刀を振り降ろした。しかし、心が前転してそれを回避した。

それと同時に正太郎が飛び上がる。

「何！？」

心は慌てて体勢を立て直し、面をガードした。

カッ！

両者の竹刀がぶつかり合う。

「なかなかやりますね」

「身分の座が関わってるからな。敗ける訳にはいかない」

両者は飛び退き、間合いを取った。

（相手は残像拳が使える。さて、どうしたものか）

そう思つて何気無く横に目を配る。

すると壁に立て掛けられた正宗がオーラを放っていた。

「東宮とか言ったな。これから私は本気で行く。本気の私に勝てるかな？」

言って心は竹刀を投げ捨て、壁に立て掛けられた正宗を引き寄せ、て掴んだ。

「木刀に変えたからって、形勢は変わりませんか？」

「そいつはどうか？」

そう言っ心は正太郎の視界から一瞬で消失し、頭上に現れた。

「上ですか？」

正太郎が飛び退くと、そこに心が着地した。

「隙あり！」

正太郎が体勢を立て直そうとしている心の胸を取った。

「なっ！？」

心は正宗を落とし、床に膝と手を着いた。

(この私が、正々堂々と勝負して敗けた！？)

「僕の勝ちですね。約束ですよ、綾崎さん？」

「ああ。女に二言は無い」

心はそう言っ立ち上がると、正太郎に握手を求めた。

「楽しかった」

「僕も楽しかったですよ。またやりましょう」

と正太郎が心の手を掴んだ。握手成立。

すると回りから歓声が上がった。

「何だこの騒ぎは？」

「これは皆が僕の為に祝ってるんですよ。僕が綾崎さんに勝って、綾崎さんが僕の彼女になったから」

(はっ！ 忘れてた！ 私、こいつとそんな約束してたんだ！)

「東宮、もう一戦しろ」

「駄目ですよ。約束は守らなきゃ」

「くっ……」

心は言葉に詰まった。

第01話：座を懸けた挑戦状（後書き）

第1話はどうでしたか？心の今後、が気になりますね。

ヒナアフター

第02話：悪い事もあれば良い事もある

正太郎との勝負に敗けた心は、正太郎と仲良く手を繋いで歩いて
いた。

端から見ればバカップルそのもの。とても恥ずかしい絵だ。

「ねえ、綾崎さん」

正太郎が心に顔を向けて言う。

「何処か寄って行きませんか？」

「否、悪いが真っ直ぐ帰る。バイトがあるんだ」

「そうですか」

十字路に差し掛かり、正太郎が別れを告げる。

「では、僕はこっちなので。短い時間でしたけど、楽しかったです」

正太郎はそう言うのと心の手を放して右に曲がって行った。

心は真っ直ぐ行き、アパートを指す。

アパートに着くと、心は階段を上って2階に上がり、<綾崎>と
書かれた部屋のドアを開けて中に入る。

「ただいつ!？」

玄関には母のヒナギクが腕を組んで仁王立ちしていた。

「心、正宗を返しなさい」

「嫌だ」

断ると、ヒナギクが紫色のオーラを放ち、目を赤く光らせた。

「まあ落ち着」

「黙れ!」

心が言い掛けた所で、ヒナギクが掻き消すように言う。

「何だよ？」

「もう一度訊くわ。正宗を返すの!？ 返さないの!？」

「返さないね。正宗は私を気に入ってる。何なら、正宗に決めて貰
おうか」

心はそう言うのと靴を脱ぎ、ヒナギクを避けてリビングに入り、正

宗を中央に置いた。

「正宗は私とお袋、どっちが良い？」

すると正宗は勝手に動きだし、ヒナギクの下に飛んでいく。

「やっぱ私の所じゃない」

とヒナギクが言っつて正宗を掴もうとすると、正宗はそれを避けて心の下に行き、心の手に収まる。

「どうやら正宗自信も私が好きらしいぞ」

その言葉にヒナギクはショックを受け、ドーンと効果音を出しながら、床に手と膝を着いた。

「正宗は、正宗は私なんかより心が良いのね！？ この浮気者！」

正宗が焦り、ヒナギクの下に移動する。

「ふんだ。あんたなんか知らない！」

ガーン！

正宗はショックを受けて暗くなった。

「案ずるな。正宗には私が居る」

心が言っつと正宗はパツと明るくなり、元気よく飛んでいく。

「そう言っつ訳だから正宗は貰っつ」

心はそう言っつと、私服に着替えてバイトに向かった。

どんぐり喫茶。

此処は心のバイト先である。

「ちーっす」

心が入中に入ると、マスターの加賀^{かが} 北斗が顔を見せた。

「今日も宜しく頼むわね」

北斗はそう言っつと、店を出て行くこつとする。

「マスター、何処行くんだ？」

心の問いに北斗は振り向き答える。

「買い出し」

「気を付けるよ」

「そうかい。心ちゃん、君はクビね」

「そうですか、クビですか。って、クビ!?!」

「ええ。だって君、いつも客追い返してるじゃん」

「否、あれは向こうが私のお尻を触るから」

「言い訳は良いわ。兎に角そう言う事は店の信用問題に関わる事なの。だからもう君には辞めて貰うわ。給料も出ないよ」

「そんなー」

心は肩を竦めた。

「解ったらさっさと出てって頂戴」

と、北斗が心を店外に追い出す。

「ちよっ、マスター!」

しかし返事は無かった。

心は俯き、店を離れた。

「はあ」

と溜め息。

(最悪だ。減給じゃなくてクビだってよ。あーあ、最悪だ)

そんな事を思いながら歩いていると、掲示板に広告があるのに気付いた。

それは三千院家の執事募集の広告だった。

心はその広告を読んだ。

『三千院家では執事を募集しています。男女は問いません。ご希望の方は三千院家お屋敷まで尋ねて下さい。月給は住み込み、アルバイト共に326,675円! 希望者待っています! by ナギ』

「何これ! 待遇よくな!?」

次のバイトこれにしよう! 心はそう決めると、早速三千院家に向かった。

第03話：仮執事心

心は三千院家の前に居た。

「よし！」

門を開けて敷地内に入る。

すると警報が作動し、SPの軍勢がやって来て心を囲んだ。

「何だ君は！？」

サングラスを掛け、黒服を着たがっしりとした体型の髭を生やした男が心に訊ねた。

「あんたら何者？」

「我々は三千院家を守るSP部隊だ！ お嬢様に危害を加える族は誰であろうと許さん！ 成敗してくれる！」

「案ずるな。私は危害を加えに来た訳では無い。アルバイトの募集広告を見て申し込みに来たんだ」

「そうでしたか。では我々が屋敷まで案内しましょう。この敷地はとても広いですから、初めてのの方はよく迷子になるんですよ」

がっしりした男がそう言うと、屋根が開いた赤い車が現れた。

「これにお乗り下さい。屋敷まで私がお連れしますよ」

と運転席に座ってハンドルを握ってる女性がそう言った。

推定、三十路前後。

「これはこれはマリアさん。いつもご苦勞様です」

とSPの方たちが頭を下げた。

「ん……………」

心はマリアの顔を見て唸り出した。

疑問符を浮かべるマリア。

「おばさん、今いくつ？」

ピキッ！

マリアの額に青筋が立った。

「私は未だ19歳です！ おばさんじゃありません！」

するとSPの方たちが何か言いたげな顔をした。大方、サバ読んでるよ、とでも言いたいのだろう。

「何ですか、あなたたち？」

マリアがSPの方たちを睨んだ。

SPは「何でもありません」と言うと、慌てて持ち場に戻った。

心は助手席に回って乗り込んだ。

マリアはそれを確認すると、アクセルを踏んで車を出し、屋敷を目指した。

「あの、マリアさんでしたよね。この屋敷には長いんですか？」

「ええ。十数年くらい居ますわ」

「先刻19歳って言ってたけど、計算合いませんよね、それじゃ訊ねるとマリアは居眠りをした。

「運転中に寝るなよ!？」

「あ、すみません。居眠りしてしまいました。それで、何の話でしたっけ？」

「否、もう良いです」

この時、心は思った。この人に年齢の話はタブーだ、と。

「そうですね。そう言えば、未だ名前を訊いてませんでしたね。何て言っんですか？」

「綾崎 心。心と呼んで下さい」

「え？ 今、綾崎と仰いました？」

「仰いましたよ」

「お母さんの名前、綾崎 雛菊さんでは？」

「知ってるんですか？」

「ヒナギクさんは、15年くらい前に此処で働いてた執事くんの奥さんなんです」

「パパが働いてたんですか？」

「そう言えば、あの子がお嬢様から借りた15、6804、000円はどうなったのかしら？ 未だ返し切れてないと思ったんですが

……」

(パパ、何でそんなの借りたんだよ?)
「着きましたよ」

マリアがそう言って車を停める。

二人は車を降りて屋敷の中に入った。

「執事長の部屋に案内します。付いて来て下さい」とマリアが心を執事長室に案内する。

「クラウスさん、面接の方がお見えになりました」

マリアが言うと、白髪で眼鏡を掛けたお年寄りが答える。

「そうか。マリア、ご苦労だった」

心はクラウスと呼ばれるお年寄りの前に立った。

するとクラウスが目をハート型にし机を飛び越えて心に抱き付いた。

「どうやら、クラウスは心に惚れてしまった様である。」

「何なんですかこの人？」

「執事長のクラウスさんです。悪い人ではないので、多少の行いは許してあげて下さいね」

心はその言葉に「はあ」と素っ気無い返事をした。

倉臼クラウス 征史郎と申します。お嬢さんのお名前、教えて頂けませんか？」

「あ、綾崎 心です」

「ん、綾崎？」

「クラウスさん、その娘はハヤテくんの娘さんなんですよ」

「それは本当か!？」

クラウスは驚いて心の顔を改める。

「む、これは？」

クラウスが心の胸元にある飛行石に気付いた。

「ああ、これはパパの形見なんです」

「どうやらマリアの言うことは本当らしいな」

「クラウスさん、私の言葉を信じてなかったんですか？」

「否、そう言う訳じゃないが……。所で、執事の面接だったな。心

くん、君が現在通ってる学校名を教えてくださいか」

「潮見高校です」

「ならん！ ならんぞそれは！ 今直ぐ白皇学院に転校するのだ！
それが我が三千院家執事になる為の第一条件だ！」

とクラウスは格好良く心を指差した。

「と言う事で一応仮採用だ」
ズザー！

心とマリアは転んで床を滑った。

「さて心くん。早速今日から働いて貰う事になるのだが、先ずはこ
れに着替えてくれたまえ」

クラウスはそう言っタンスて箆笥から執事服を取り出した。

心はそれを受け取り、マリアと共に部屋を出た。

「私の部屋で着替えて頂きましょうか」

マリアはそう言っタンスて心を自室に案内した。

「此処が私の部屋ですよ」

とマリアが部屋のドアを開けた。

「え、マリアさんこんな広い所に一人で居るの！？ 寂しくない！
？」

「別に寂しくありませんよ」

「はあ」

二人は部屋に入った。

心は鏡の前に移動し、着替えを始めた。

と此処で毎度お馴染、自主規制君が現れてく見せられないよと
心の全身を隠した。

そして執事服に着替え終わると、自主規制君は何処かに行っタンスてし
まった。

「どうですか、マリアさん？」

と心が一回転して訊ねる。

「とても似合ってますわよ」

「ホントに？」

「ええ。それでは、クラウドさんの所に行きましようか」

「マリアはそう言つて、二人一緒にクラウドの下に戻つた。

「では心くん、ナギお嬢様の所に挨拶に行つてきて下さい」

「解りました」

心はマリアと共に部屋を出た。

「お嬢様の所に案内しますね」

言つてマリアは心をナギの部屋に案内した。

「ナギ、新しい執事がお見えになりましたよ」

「マリアがそう言つと、金髪ツインテールの二十歳前後の女性が現れた。」

「三千院さんぜんいん 凧だ。つて、ヒナギクじゃないか。髪染めたのか？」

「心です」

「心？」

「あ、この娘はハヤテくんの娘さんですよ」

「何!？」

ナギは驚いて飛び退いた。

「ハヤテに娘が居たのか! と言う事は、此奴はヒナギクの娘でも

あるのだな!？」

(何なんだ此奴?)

心はそう思いながらマリアを見た。

マリアはそれに目で答える。

「この娘は三千院家の主で二十歳になつたと言つのに仕事にも就いていない引き籠りです」

心もそれに目で返す。

「ニートつて奴か？」

「そうですね。何でも、働いたら負け、と思つてるみたいですよ」

「何に負けんだよ？」

「さあ」

とマリアは肩を竦めた。

「それじゃあ、次は屋敷内を案内しましょうか」

「マリアはそう言っと、ナギに会釈して心と部屋を出た。するとホワイトタイガーが現れた。」

「うわっ、何でこんな所に虎が!？」

「心は驚いて飛び退いた。」

「ああ、それはホワイトタイガーネコと言う種類の猫で、虎ではありませんよ」

「否、これどう見ても虎ですよ!？ 確かに虎もネコ科ですけど、猫がこんなでかい筈がありません!」

「心がそう否定すると、虎が鳴いた。」

「ニャー」

……………。

沈黙が場を支配した。

「つて、虎がそんな鳴き方するかよ!？」

「ネコ科だからするのでは？」

「ニャー」

「虎がそう鳴いて心の匂いを嗅ぐ。」

「タマって言うんです。可愛がってあげて下さいね」

「マリアはそう言っと去って行った。」

「えっ、一寸!？ 案内は!？」

「しかし、マリアの耳にはもう届かない。」

「はあ」

「心は溜め息を吐いてタマを見る。」

「(これどう見ても虎だよな?)」

「お座り」

「心が何と無くそう言っと、タマがお座りをした。」

「お手」

「お手をするタマ。」

「(凄え! 此奴利口だ!)」

「他にもやってみよう そう思って無理難題を押し付けてみる。」

「タマ、三回回ってワンと鳴け」

(つて、虎が出来る訳無いか)

そう思っていると、タマが三回回って「ワン」を見事にやっつけた。

(やべー！)

タマは慌てて口を塞いだ。

「お前、今ワンって言わなかったか？」

その問いにタマは慌てて首を左右に振るう。

「三回回ってワン」

タマは三回回って「ワン」と鳴いた。鳴いてしまった。

(やべえ。バレたかも)

とタマは後退りを始める。

「お前、利口だな。こんなに利口だとひよっとして喋れんじゃないか？ 誰にも言わんから何か喋ってみろ」

心はそう言っで間合いを詰めた。

「本当に喋らないか？」

タマは思わずそう口にした。

「ああ、しゃべ……って、マジで喋りやがった此奴！」

「何だ、虎が喋っちゃ悪いのか？」

「悪いよ。てかそもそも虎の声帯じゃ喋れんだろ。何で喋れんだよ？」

「それはオレが特別だからに決まってるじゃないか」

「オレってお前、雄か？ 因みに私は女だ」

「何！？ しまった！ オレとした事が、女の子夢を打ち壊してしまったぜ！」

「否、女の子は虎が喋らない事に夢は持ってないから。どっちかつと喋る事に夢を持ってるからな」

「そうか。なら喋っても平気だな」

「待て。そんな事したら確実に女の子は気絶だし、その上見世物にされるぞ」

「じゃあどうすれば良いんだよ？ このままじゃオレ、女の子の夢

打ち壊す事になっちまうよ」

「否、喋らなくて良いから。そもそも虎が喋るなんて有り得ない事だろ」

「言われてみればそうだ。それよりお前、可愛いな。是非オレの嫁になってくれ」

「恐ろしいから却下だ」

「そんな事言わずになってくれよ。オレ、飼い虎だから女が居なくて困ってんだよ」

タマがそう言って心を押し倒す。

「あー、解った解った。なってやるよ」

「本当か!？」

「ああ。だから退けな」

「ひゃっほー!」

タマは退くと大喜びで去っていった。

「ふう」

と安堵の溜め息を吐く心。

(怖かった……)

この先、一体どうなる？

第04話：合格

「白皇に転校したい」

自宅に帰るなり、心はいきなりヒナギクに言った。

「はあ？」

ヒナギクは訳が解らず疑問符を浮かべた。

「実はな、パパが昔働いてたって言う屋敷で執事のバイトをやる事になったんだ。そこでそのバイトの条件が白皇に通う事なんだ」

「へえ。って、何よその条件？」

「知るか。そんな事より推薦書貰ってきた」

心はヒナギクに推薦書を渡した。

マリアからの推薦となっている。

これを白皇に出せば良いらしい。

「解った。後で出して来るわ」

「ああ。所で晩ご飯」

「自分で作って。私もう寝る」

ヒナギクはそう言って推薦書を仕舞うとベッドに潜り込んだ。

心は台所に入り、適当に晩ご飯を作って食べ、風呂を済ませパジャマを着て布団を敷いて潜り込み、就寝した。

翌朝、心が潮見に向かってしていると、昨日の十字路で正太郎に出会った。

「おはよう御座います、綾崎さん」

「誰だお前？」

「えっ！？ 僕ですよ、東宮 正太郎ですよ」

「知ってるから。私が奴隷の名を忘れる訳無かるっ」

「一寸待て！ 僕は奴隷じゃなくて彼氏でしょ！？」

「そんなのどっちでも良い」

「綾崎さん、虐めっ子？」

「虐めっ子言うな。それと心と呼べ」

「心さん、ですか？」

「ああ」

「解りました。今度からそう呼びます。その代わり、心さんも僕の事は正太郎って呼んで下さい」

「しょ……しょ……」

「言えなかった。」

「それはそつだ。好きでもない男をそう呼べる筈が無い。」

「やっぱ東宮と呼ばせてくれ」

「駄目ですよ。僕たち付き合ってたから名前で呼び合わないと」

「無理だ」

「即答した。」

「第一好きでもない男を名前で呼べるか？」

「え、僕に気があるから挑戦受けたんじゃないの？」

「な、何を言う。私はただお前を奴隷にしたかったから挑戦を受けただけだ。そりゃまあ、少しは格好良いとか思ったけど、好きって言う感情は芽生えていない」

「心は頬を赤らめるとそう言った。」

「やっぱあるんですね？」

「ガスンッ！」

「心の拳が正太郎の頬に埋まらずまる。」

「何するんですかいきなり!？」

「インフルエンザウイルスが居たから潰してやったんだ」

「もや もんですか!？」

「五月蠅いぞお前。殺されてえのか？」

「すみません」

「正太郎は頭を下げると口を閉じた。」

「そして学校に着くまで、一言も喋らなかつたと言う。」

昼休みを迎え、心は食堂で正太郎と飯を食っていた。

「東宮。お前に言つときたい事があるんだ」

「何ですか？」

「私、白皇に転校するかも知れない」

「え？」

「実は今、執事のバイトをやってるんだ。で、そのバイトの条件が白皇に通ってる事なんだ。だから白皇に転校するんだ。そうなるとお前とも逢えなくなるな」

「でしたら僕も行きますよ」

「マジ？」

「ええ。スポ薦で手続きすれば簡単ですから。これでもし心さんが白皇に転校しても、逢えなくなる事は無くなる訳です」

説明しよう。スポ薦とは、スポーツ推薦の事である。

心は正太郎をマジマジと見詰め、こう言った。

「ストーカー」

「違うよ！ 僕たちは交際してんだからストーカーなんて言わないよ！」

それを聞いた心はクスクスと笑う。

「何が可笑しいんですか！？」

「お前、予想通りの反応するから面白いなって思っ」

「そっですか」

「ああ。ごちそうさま」

心はそう言つて席を立ち、食器を返却口に運んで戻った。

「お前、私より先に食ってるのに遅いな」

「あなたが早いんですよ！ 食事が5分つてどんだけですか！？」

しかしその問いは黙殺された。

「これ貰うな」

心は正太郎の皿に載っていた海老フライを摘んで口に運んだ。

「あ、それ僕の大好物なの！」

「お前がいつまでも残しとくからだ」

「僕は好物は最後に食べるんですよ！」

「先に食べよ」

「楽しみが無くなります」

心は辺りを見回して席を立った。

「何処行くんですか？」

「何処でも良いだろ」

心はそう言っただけで他の食事中の人たちの下へ行き、海老フライが載っている皿を見付けると、そこから海老フライを奪取した。

「あっ、それ俺の！」

「ああ！？」

心は睨んだ。

「ど、どうぞ貰って下さい。その方が海老フライさんも幸せです」

「サンキュウ」

礼を言つと心は海老フライを持って正太郎の下に戻った。

「詫びだ。貰っとけ」

「え、でもこれ、あの人のじゃ？」

「くれたんだから良いんだよ」

「僕には無理矢理盗んできた様にも見えませんが」

「悪いか？」

「駄目ですよそんな事！？」

「私は可愛いから何しても許されるんだ」

「そう言う問題じゃないでしょう！？ 兎に角返ってきて下さい！」

「何だ。折角お前の為に盗ってきてやったのに食わないのか？」

「盗んだものなんか食べません。返ってきて下さい」

「解ったよ」

心は盗んだ海老フライを返しに行き、謝罪して戻ってきた。

「これで良いんだろ？」

「はい。けど嬉しかったです」

「海老フライか？」

「はい。盗るのいけません、人の役に立とうと言うのはとても良いことだと思います」

「そうだな」

「心さん、回りが言う程悪い人には見えません」

「そうか？」

「はい。とても優しいです」

「……有り難う」

心は席を立って去っていった。

放課後、心は剣道部の部室に来ていた。

理由は剣道部の部員だからである。

「綾崎さん、相手お願いします」

部員の一人が誘いに来た。しかし心は追い返す。

「お前じゃ相手にならない」と。

「じゃあ僕とやりましょうよ」

次に誘ってきたのは、正太郎だった。

正太郎は剣道部の部長をやっている。

「手加減しろよ」

「了解」

二人は胴着を着け、中央に立った。

「そつちから来て下さい」

心は駆け、竹刀を振るった。しかし、一瞬で弾かれ、面を取られる。

「やめた」

心は胴着を脱ぎ捨て元の場所に戻った。

「心さん、どうしたんですか？」

「やる気失せたんだよ」

「そうですか」

と正太郎は去っていく。

(帰るか)

心は更衣室に行き、着替えて帰り支度をし、部室を跡にした。

自宅に着くと、ヒナギクが「御目出度う!」と言った。

「何がだよ?」

「合格したのよ、白皇に!」

「マジか!?!」

「マジよ。これで明日から白皇ね。制服は私があるからそれ着るのよ」

「バタッ!」

心は嬉しさのあまり、気絶してしまった。

「わっ、心!?!」

ヒナギクは慌てて心を抱き、ベッドへ運んだ。

そして心は翌朝目を覚ました。

第05話：白皇学院

練馬区に広大な敷地を持つ進学校。名を白皇学院。
白皇学院は小中高一貫で都内でも有数な学校である。
そんな学校の前に、心は居た。

（此処があ有名な白皇学院）

「よし！」

心は気を引き締めると校門を潜った。

すると何処からともなく「ヒナえもーん！」と水色の髪の女性が
走って来て心に抱き付いた。が、直ぐに距離を取る。

「って、ヒナじゃない！ お前誰だ！？ さては侵入者だな！」

女性はそう決めつけると、いきなり心に襲い掛かる。しかし、心
にひらりと身をかわされ、女性は地面に顔面から突っ込んだ。

「何なんだためえは！？」

心は女性を睨みながら言った。

「その前に貴様から名乗って貰おうか！」

（何なんだこの人？）

「えいつ、名を名乗れ！」

と女性が間合いを詰めた。

心は仕方なく名乗る。

「今日、転校してきた綾崎 心です。宜しく願いしまーす」

心は棒読みで言っつて律儀にも頭を下げた。

「綾崎？ 何処かで聞いた事あるような……。まあ良いか。私はこ

の学校の教師、薫かおる 雪路よ」

「あ、そ」

心は雪路を無視して校舎に向かった。

その途中、木の上で立ち往生してる男を発見した。

「お前そんな所で何やってんの？」

心は気になり、近付いて訊ねた。

「何もしてねえよ！ 別に高いのが怖くて降りられねえとかそんなんじゃねえからな！」

(うわ、何てツンデレ振りなんだ)

「成る程。平たく言ううと高所恐怖症って奴？」

「平たく言っくな！ 兎に角、飛び下りるから受け止めてくれ！」

「えっ、一寸待て！」

しかし男は無視して飛び下りた。

ゴスツ！

心は顔面で男を受け止めた。

「てめっ、人の顔面に着地する奴があるか！？」

「受け止めるって言っただろ」

「っーか、何で怖いのに登ったんだ？」

「ああ。それはあれさ」

男は木の枝に乗った鳥の巣を指差した。

「あそこから雛鳥のチャー子が落ちたから助けてやったんだ」

と、その時、カラスがやって来て雛鳥に襲い掛かる。

「おい、お前！ チャー子を虐めんじゃねえ！」

と男はカラスに向かって地面に在った石を拾って投げた。しかし、

カラスがその石を羽で跳ね返した。

コッソ！

跳ね返った石が心の頭に当たった。

心は額に青筋を立て、先程の石をカラス目掛けて蹴飛ばした。

石は物凄いスピードでカラスの目前を通過し、カラスをビビらせる。

「今のスピードで当てたら即死か？」

するとカラスは慌てて逃げて行った。

「お前、チャー子を救ってくれて有り難うな。俺、薫かおる 雪ノ介だ。宜しく」

雪ノ介は心に握手を求めた。

「良いつて事よ」

心は雪ノ介の手を握った。握手成立。

「私は綾崎 心だ」

「聞かない名前だな。ひよっとして転校生？」

「今日からなんだ。よく判ったな」

「母さんから聞いてたんだ」

「母さん？」

雪ノ介は校門の前で佇んでいる雪路を指差した。

「あれお袋さんなの!？」

「あんなのが母さんで困ってるよ。それより職員室行くんだろ？」

案内してやるよ」

そう言つて雪ノ介は心を職員室に案内した。

「失礼します」

と入室する二人。

雪ノ介はプラモが一つ飾られた席に座る教師の下に移動して言う。

「父さん、転校生連れてきた」

雪ノ介は手招きをして心と呼んだ。

「伯父さん？」

「そう言う君は心ちゃんか？」

「そうですけど」

「大きくなったな。義妹いもむとにそっくりだ」

二人が久しぶりの再会に浸っていると、雪ノ介が言った。

「父さん、知り合い？」

「何言つてんだお前。小さい頃に逢った事あるだろ。従姉の心ちゃ

んだ」

「マジ？」

「お前、あん時の泣き虫か。何処かで見たことある顔だなあつて思

つてたんだけど、やっぱそうか」

「暴力女！」

雪ノ介はそう言い放つて逃げようとしたが、心に頂を掴まれてしまった。

「それは聞き捨てならんな」

「ごめんなさい！ 撤回するから放して！」

心は雪ノ介を放した。

「うわっ！」

雪ノ介は勢いあまって前に倒れた。

「いきなり放すなよ！？」

「放せつて言ったのそっちじゃん」

「まあそうだけど。それより、母さんだぞ。担任」

だよな？ と京ノ介に顔を向ける雪ノ介。

「可哀想に。雪路に金をたかられないよう気を付けてくれ」

その言葉に心は言葉を失う。

まあそんな訳で、心の新しい学校生活は始まった。

第06話・束の間の団欒（前書き）

ファン必読。伊澄が出ます。

ヒナアフター

第06話：束の間の団欒

学校が無事終わり、心は屋敷へ行くついでにレンタルビデオ店に立ち寄った。

「いらっしやい」

とレジの前に座った店員が言う。

「っってお前、校則違反じゃねえか！」

店員は驚いて目を丸くした。

「何か問題あるか？」

「大ありだよ！ それ白皇の制服だろ？てか、お前何処か見た事あるような顔だな」

店員はそう言っつて心の顔をマジマジと見詰める。

「お前、ひよっとして、借金執事の子どもか？」

「借金執事？」

「綾崎 颯だよ」

「おっちゃん、パパの知り合い？」

「おっちゃんじゃねえ！ 橘財閥の三千院「フツエル さんぜんいん」 巨「ワタル」だ！」

「橘なのに何故姓が三千院なんだ？」

「それは結婚したからだ」

「ひよっとしてナギと？」

「よく知ってるな」

「三千院っつて言ったらナギしか思い付かん。しかもバイト先だ」

「バイト？ お前、メイドかなんかやってんのか？」

「否、執事だ。それより、ナギの使いでDVDを借りにきたんだが」

「ったく、またかよ。で、何を借りるんだ？」

「これだ」

心は懐からメモを取り出してワタルに見せた。

「ああ、これか。あいつも好きだなあ」

そう言いながらワタルはDVDを取りに行き、直ぐに戻ってきた。

「ほらよ」

ワタルが心にDVDを渡す。

「料金は返却時に払ってくれりゃ良いから」

「ああ。じゃあな」

心はそう言つと、DVDを鞆に仕舞つて店を出た。
すると学校帰りの正太郎と出会った。

「心さん？」

「東宮か。私は今日から白皇だぞ」

「もう転校したんですか？」

「ああ。そう言つ訳だからお前とはもう逢えないな」

「では明日手続きして、来週には」

「ストーカー」

「違うよ！」

「あ、そ。じゃあな」

心はそう言つて去つていった。

三千院家に到着すると、心は門を抜けて屋敷を目指した。

所が途中で迷子になり、森の中へ入ってしまった。

（此処は何処だ？）

と辺りを見回す心。

（つーか何で森があんだよ！？）

とその時、何処からとも無く「あーあー！」と言つ声が聞こえてきた。

心は、気のせいだ、と自分に言い聞かせ、森を進む。

「あーあー！」

再び聞こえた。しかもそれは、どんどん大きくなっている。

「あーあー！」

その時、心の真横を何か猛スピードで駆け抜ける……否、人が蔓つるに掴まって通過した。

そいつは心に気付くと、蔓を放して目の前に着地した。
「お前、迷子か？」

そう訊ねるのは、たった今日の前に降りてきた13歳くらいの金髪ポニーテールの少女だ。

「誰お前？」

心はそう口にして疑問符を浮かべた。

少女は心の問いに答える。

「私は三千院さんぜんいん 奈瑠。お前は誰だ？」

「執事だ」

「それは名詞だ。私はお前の姓名を訊いているのだ」

「綾崎 心。三千院家で執事のアルバイトをやってる」

「そうか。で、迷子なのか？」

「ああ、迷子だ。つーかお前、三千院って言ったな。と言う事は、此処の敷地には詳しいのか？」

「ああ、少しはな」

「屋敷まで案内してくれないか？」

「土下座でお願いしますって言ったら案内してやる」

「……………」

心は言葉を失う。

「どうした。出来ないのか？」

（こ、この私が、年下に土下座だと！？ そんな事出来る訳が無い！ 此処は年上の私が偉いと言う事を証明してやれねば！）

心は奈瑠に近付き、頭を小突いた。

「いたっ！ 何をする！？」

奈瑠は涙を浮かべながらそう言った。

「こんなのが痛いのか。弱虫だな」

「弱虫言うな！」

奈瑠は心の腹に跳び蹴りを放った。

「うっ！」

心は激痛に呻き声を上げ、腹を押さえて蹲うつまった。

「てめ……子どもが生めなくなったらどうしてくれるんだ……？」
と顔を引き攣らせて言う心。

「そんなの私の知った事か。それより屋敷に案内して欲しかったら
土下座しろ」

（くっ、するしかないのか……。仕方ない。此処は素直に土下座し
て、屋敷に着いた瞬間ボコス！）

心はそう決めると、徐に土下座をした。

「屋敷に案内して下さい！」

「良いだろ。付いて来い」

奈瑠はそう言っつて屋敷に向かって歩き出した。

心は立ち上がり、その後を追う。

そして森を抜け、屋敷に着くと、奈瑠が「着いたぞ」と言った。

「おう、有り難う、な！」

心がそう言っつて奈瑠の頬をぶん殴ろうとすると、猫が慌ててやっ
て来て心の顔に飛び付き、爪を立てて引っ掻いた。

「ぎゃあああああ！」

顔中を傷だらけにされた心は叫び声を上げてその場に倒れた。

「助かったぞ、白野威^{シノノスイ}」

奈瑠はそう言っつて猫の頭を撫でてやった。

それと同時に騒ぎを聞きつけたメイドのマリアが屋敷内から姿を
現し、心の無惨な姿を確認した。

「奈瑠、これは一体何があったのかしら」

「あ、聴いてくれマリア！ この女が私を殴ろうとしたのを、白野
威が助けてくれたんだ！」

「はあ」

マリアは奈瑠を見るとそう返事して心に向き直った。

「心さん、大丈夫ですか？」

「ああ、何とか」

「全く。駄目ですよ、直ぐに暴力振っちゃ」

「このクソ生意気なガキが私に土下座をさせたんだ！ 屈辱的な事

「この上無かつたんだぞ!？」

心は起き上がり様に奈瑠を指差してそう言った。

「執事ならそれぐらい我慢しなさい。それより傷の手当てしますから、私の部屋に来て下さい」

「否、結構だ」

「でもそのままでは黴菌が入ってしまうので、せめて消毒だけでも必要無い」

「そうですね。何が遭っても知りませんよ?」

「マリアはそう言っと、屋敷の中へ入って行った。

それと同時に心が立ち上がり、後を追うように屋敷内に入る。

「よう、心」

と二足歩行したタマが現れて声を掛けてきた。

「うわっ、虎が二足歩行すんな! 驚くだろ!？」

と驚き飛び退く心。

「別に良いだろ。二人だけなんだから。てかその顔どうしたんだ?」

「ああ、これか? これは先刻、外で白野威とか言う猫に引っ掻かれたんだ」

「何!? オレの心ちゃんに傷を付けるとは……。白野威め、許してはおけん!」

タマが炎に包まれた。

「お前燃えてるよ!」

「安心しろ。ただの幻覚だ」

そう言つと、タマを包んでいた炎が消えた。

「何だ、幻覚か。て言つかお前、怖いからもう来んな」

すると突然、タマが跳んで心を押し倒し、上に乗し掛かった。

「殴るぞ?」

「やってみろ」

心はタマにグーで殴り掛かる。が、既の所でそれは留まる。

「殴れない。私には殴れない」

「ふっ。それでは執事は勤まらんな」

「何とでも言え。あ、そうだ」

「どうした？」

「先刻、森の中で雌虎を見たぞ」

「何！？ こうしてはおれん！」

タマはそう言うのと慌てて屋敷を出ていった。

心は「ふう」と安堵の溜め息を吐いた。

(助かった。けどどうしよう。嘘を吐いてしまった。屹度、後で大変な目に遭うだろうな)

そう思うと、心は「はあ」と溜め息を吐いた。

その瞬間、タマが再び現れた。

「ためえ騙したな！？」

「うわぁっ！」

心は慌てて立ち上がり、階段を上って上に移動した。
するとタマが追い掛けてきて心を壁まで追い詰める。

「よせタマ！」

「嫌だね！」

「ごめんよタマ！ 嘘吐いた事は謝る！ だからよせ！」

「反省してるなら俺の子を生め」

「それは却下！ 私は人間だ！ 人間は人間の子しか生まないんだ
！」

「そうか。なら無理にでも」

タマがそう言い掛けた刹那、小刀形の手裏剣が飛来して壁に突き刺さった。

「誰だ！？」

タマが後ろを振り返ると、シャンデリアに水色の髪をした二十歳
くらいの青年がぶら下がっていた。

「タマ、僕の娘に変な事したら許さないからな」

「なっ、貴様は借金執事！ 死んだと聞かされたが生きてたのか！
？」

「否、死んだよ。死んだけど、訳ありで降りて来たんだ」

「訳あり？」

「別にお前が知る必要無いだろ」

「けっ、そうかよ」

タマはそう言うのと去っていった。

青年はシャンデリアから手を放して床に着地し、階段を上って心の下に来て手裏剣を取ると言った。

「怪我は無いかい？」

すると心は青年に抱き付いて泣き出してしまった。

「よしよし、もう大丈夫だぞ」

青年はそう言うのと、手裏剣を仕舞って心を抱き締めた。

「それはそうと、大きくなったな。ママにそっくりだ」

もうお分かりであろう。この青年は言うまでもなく、綾崎 颯である。

何故に現世に居るのかと言うと、今日は3月3日。ヒナギクの誕生日であり、彼女を祝う為に降りてきたのだ。

「さてと。それじゃあパパは家に居るから、仕事頑張るんだぞ」

ハヤテはそう言うのと心を解放し、踵を返して階段を降り、屋敷を出ていった。

午後7時。

執事のバイトを終えた心は、自宅へと帰宅した。

「ただいま」

そう言うのと、いつもよりテンションの高いヒナギクが「おかえり」と笑顔で出迎えた。

「テンション高えな。何かあったのか？」

「何って、久しぶりにパパが帰ってきたのよ。こんなに嬉しいことは他には無いわよ」

そう言うってヒナギクはリビングへと入っていく。

心は靴を脱ぎ、リビングへと移動した。

「おかえり」

ハヤテが心に笑顔で言う。

「ただいま。そしておかえり、パパ」

「ただいま。執事の仕事どうだった？」

「一寸聞いてよパパ」

心がそう言つてハヤテの横に座り、屋敷で遭つた事を話そうとすると、ヒナギクが割り込んできた。

「心、その顔の傷は何？」

「気付くの遅いよ！ っ、そんな突つ込みは無視して、これは屋敷で白野威とか言う猫に引つ搔かれて出来た傷だ」

「そう。じゃあ手当てしないとね」

ヒナギクはそう言つと救急箱を用意し、マキ ンと書かれた消毒液を取り出した。

「良いよそんなの」

「駄目よ、ちゃんとしくちや」

心は立ち上がりつつ後方へゆっくり下がりはじめた。

「ハヤテくん、心の事捕まえてくれる？」

「解りました」

ハヤテはそう言つて一瞬で心の背後に回り羽交い締めにした。

「ちよつ、放して！」

「心、傷はちゃんと消毒しなきゃ駄目じゃないか。何で嫌がるんだ？」

「だって染みるんだもん」

そう言つてる間に、ヒナギクの魔の手が心に迫る。

「来んなつ、あつち行け！」

「心、良い子だから静かにしてね」

「私は悪い子だ！」

心はそう言つとヒナギクが持っていたマキ ンを蹴り上げた。が、直ぐにヒナギクが反対の手で掴む。

（こつ、このままでは拙い！ 何か策は無いか！？）

とその時、心は後方へ引つ張られて倒れ、ハヤテに両足を固定された。

「ちよつ、卑怯じゃないかこれ!？」

「あなたが暴れるからよ」

ヒナギクはそう言つてチリガミを取り、マキンを心の傷に垂らす。

「ぎゃあああ!」

心は激痛に叫んで泣いた。

ヒナギクはそんな心を見て肩を竦める。

「この娘、いつもこうなのよ？ 何とかならないかしらね」

「丸で高所恐怖症のヒナギクさんみたいですね」

「いつまでも高所恐怖症じゃないわよ」

「克服したんですか？」

「したわ。心が生まれて直ぐ」

「そうですか。つて、逃げられた!」

ハヤテとヒナギクは部屋の隅っこを見た。

すると心がそこで小さくなっていた。

「子どもですね」

二人はそんな心を見ながらクスクスと笑った。

「あそこまで嫌がると、少し異常ですよね」

とそこに現れたのは和服姿の女性、鷺ノ宮^{さぎのみや} 伊澄。

「ハヤテ様、お迎え上がりました」

「え、もうそんな時間ですか？」

その問いに伊澄は時計を指差した。

時刻は午後8時を回っている。

「あ、本当だ。ではヒナギクさん、僕はこれで逝きます」

ハヤテはそう言つて立ち上がる。

「もう逝っちゃうの？ 未だケーキ食べてないのに」

「それは後でお墓に持ってきて下さい」

「解った。次はいつ来るのかしら?」

「判りません。今、あの世あっちで神様の執事やってるんですよ。それが忙しくてなかなか休みが取れないんです」

「あなた死んでも執事続けてんの？」

「はい、それが僕の生き甲斐ですから」

「もう死んでるでしょ？」

「そうでしたね。それじゃあ」

ハヤテはそう言ってヒナギクの唇に自分のそれを重ねると、伊澄と共に去っていった。

第07話：ツンデレな男（前書き）

雪が落ちる第7話。

「助けてくれなんて頼んでねえぞ！b y・雪ノ介」

ヒナアフター

第07話：ツンデレな男

有名進学校、白皇学院。

心はその時計塔を眺めていた。

「気になるか？」

そう訊ねたのは薫かおる 雪ノ介だった。

「お、弱虫じゃないか」

「弱虫言っな！で、気になるか？」

「ああ」

「この頂上にはな、生徒会室があるんだ」

「ふーん」

「そのバルコニーから見える景色もう最高でさ。上ってみるか？」

(注：雪ノ介は高所恐怖症です)

「ああ」

「じゃあ行こうか」

雪ノ介はそう言ってエレベーターの前に移動し、ボタンを押してドアを開けた。

「雪、良いのか？入って」

心は入り口に貼られた、<許可無き者の立ち入りを禁ずる>と書かれた紙を指差した。

「俺が許可する。俺、生徒会長だから」

「ふーん」

心は可哀想な者を見る目で見詰めた。

「何だよその顔？」

「別に？ そんな事より、早いところ上ろうぜ」

心はそう言っつて、雪ノ介と共にエレベーターに乗り込んだ。

ヒナアフター

最上階に着き、生徒会室に入る二人。

心はバルコニーに出て絶景を眺めた。

「雪、良い眺めだぞ」

「俺は良い」

「何だ、見ないのか？」

心は振り向き様に訊ねた。

雪ノ介は「見てるよ？」と目を瞑り答えた。

「目瞑ってたら見えないじゃないか」

「心の目で見てるんだ」

「怖いのか？」

その問いに雪ノ介は目を開けた。

「こ、怖い訳無えだろ！」

そう言っただけでバルコニーに出て来て絶景を眺める雪ノ介。

彼は絶景に恐怖を覚え、足が竦みだした。

そしてついに耐えきれなくなり「怖い！」と涙目で心に抱き付いた。

心は「よしよし」と抱き締めてやった。

そこへ、三人の女生徒が現れた。

「ほほう」

「おやおや？」

「何やってるの？」

その三つの声に驚いた心と雪ノ介は慌てて離れた。

「薫くん、その娘誰？」

と一人の少女が訊ねた。

「俺の従姉」

「綾崎 心だ。心と呼んでくれ」

「趣味は弱い者虐めだ」

「そうそう。弱い子を見るとつい蹴り飛ばしたくなるんだよね。っ

て、誰の趣味が弱い者虐めだ!？」

心はそう乗り突っ込みをして助走無しドロップキックを雪ノ介にお見舞いした。

攻撃を食らった雪ノ介は吹っ飛んでバルコニーから転落を開始。
「やべっ！」

心は慌てて駆け寄り、雪ノ介の足を掴み・・・損ねた。
「うわあああああ！」

雪ノ介は悲鳴を上げながら、真つ逆さまに落ちていった。
「雪！」

心は咄嗟に飛び降り、雪ノ介に追い付き、彼をお姫様抱っこすると、体勢を立て直して着地した。

「てめえ、殺す気かよ!？」

「んな気無えよ。それに、殺意があつたら助けねえ」

「本当かよ？」

「私は嘘は吐かない」

「あ、そ。て言うか降ろせよ？」

雪ノ介は頬を赤らめそう言った。

心はそれに従い、彼を降ろした。

雪ノ介は心から顔を逸らして「……………とうな」と言った。
「え？」

よく聞こえなかった心は首を傾げた。

「雪、今何て？」

「な、何でも無えよ！ じゃあな！」

雪ノ介はそう言って走り去っていった。
(何怒ってんだ、あいつ?)

第07話：ツンデレな男（後書き）

第5話の薫 京ノ助を薫 京ノ介に修正しました。同時に雪ノ助も雪ノ介に変更。

第08話：転校生（前書き）

ストーリーカー少年が転校して来る第8話。

「心さん、同じクラスですね。by・正太郎」

ヒナアフター

第08話：転校生

3月14日、ホワイトデー。

この日は、チョコをくれたお返しに男が女にクッキーを渡す日である。

しかし、心にとっては一番嫌いな日でもあった。

それは、好きな男が居らず、チョコを上げた事が無い為、クッキーを貰えないからである。

そんな心が学校に登校すると、机の上にクッキーが一つ置いてあった。

「何故？」

心は思わずその口になると、机に置いてあったクッキーを取った。それには、手紙がくっついていていた。

手紙には『僕と付き合ってください』と書いてある。

差出人は同じクラスの貴嶋きしま 公。

容姿は、薄緑の短髪に青の瞳。見た目、とてもイケメン。

心はその少年の下に赴いた。

「あの、これなんだけど」

「うん？」

公が心の方を向く。

心はクッキーに付属していた手紙を公に見せた。

「私なんかで良いの？」

「じゃなきゃ渡さないよ」

心は暫し考え込むと口を開いた。

「お前が本気なのは解った。その気持ち、受け取るよ」

心はそう言っていると、席に戻ってクッキーを食べた。

直後、薫 雪路が入って来て教卓に立った。

「HR 始めます。だがその前に転校生を紹介しよう」

雪路がそう言っていると、教室はざわめき始めた。

「皆静かに！」

雪路がパンツと机を叩いて生徒を黙らす。

「転校生、入るのよ」

そう言うのと、転校生が入って来た。

そいつは東宮 正太郎。心を剣道で負かして無理矢理彼女にした男である。

(げっ、マジで来やがったあいつ！)

心は徐に机の下に隠れた。

すると雪路が「何やってんだ綾崎？」と訊ねる。

「ちっ」

心は舌打ちをすると、仕方なく椅子に座った。

「心さん!？」

と正太郎が驚いて目をぱちぱちさせた。

「あれ、二人とも知り合いなの？」

雪路が不思議そうな顔で訊ねた。

「僕の彼かの」

正太郎がそう言い掛けた所で心が「嘘です」と掻き消す様に言った。

「何だか知らないけど、取り敢えず自己紹介してくれる？」

と雪路が正太郎の名前を黒板に白いチョークで縦に書き込む。

正太郎はそれが終わると、自己紹介を始めた。

「潮見高校から転校して来た東宮 正太郎です。趣味は」

正太郎がそう言った所で心が「女に虐げられる事だ」と透かさず言った。

すると生徒が、

「マジで？」

「キモイ」

などと口々に言った。

「一寸待て！ 今のは心さんの嘘だから皆勘違いしないで！」

「はあ？何言ってるんだお前。私に殴られて喜んでたじゃないか」

心が言い返すと、正太郎は肩を竦めて「はあ」と溜め息を吐いた。
「心さん、僕を虐めて楽しいですか？」

「楽しい」

「うわっ、Sだ！」

「悪いか？」

心はそう問い正太郎を睨み付けた。

「悪くないです……」

二人が楽しく会話をしてると、雪路が口を開いた。

「あのさ、二人とも？ HR始められないから、そろそろ終わりに
してくれる？」

「ああ。すまん、伯母^{おば}さん」

「お、オバサン？」

と雪路が目を丸くする。

「そう言う意味じゃねえよ！ 伯父伯母の伯母だ！」

「わ、解ってるってそのぐらい」

(絶対解ってねえ、此奴……)

心はそう思った。

「そんじゃあ、東宮くん。席に着いてくれる？」

雪路が言つと、正太郎は空席を探し、心の隣に見付けてそこに座
つた。

「はあ」

肩を竦めて溜め息を吐く心。

「お前、何で私の隣に来る訳？」

「良いじゃん。恋人同士なんだから」

「御免なさい。私の彼氏、今あの人だから」

心はそう言つて公を指差した。

「どう言う事ですか、それ？」

「こう言う事だ」

心は正太郎に例の手紙を見せた。

「何て返事したんです？」

「オツケー、と」

「どうして？」

「イケメンだから。そう言う訳で、お前はもう、私の彼氏じゃないんだ。それと、お前の座ってる席は・・・」

心がそう言い掛けた所で、後ろのドアが開いて三千院 奈瑠が「おはよう御座います」と入って来た。

「って、貴様！ 何故に私の席に座ってる！？」

奈瑠はそう言って正太郎を睨み付けた。

「そいつの席だから退いてやれ」

心は正太郎をドンッと突き飛ばして椅子から落としてやった。

「いてっ！ いきなり何するんですか！？」

正太郎が立ち上がり叫ぶ。

「退け、邪魔だ」

奈瑠はそう言って正太郎を突き飛ばして席に座り鞆を置いた。

「おはよう御座います、お嬢様」

心は執事フェイスに切り替え、奈瑠にそう挨拶して会釈した。

「ふんっ！」

奈瑠はソツポを向いた。

（あれ、嫌われてる？）

「お嬢様」

「……………」

シカトされてしまった。

「あの、お嬢様？」

「……………」

反応無し。

「無視しないで頂けますか？」

「五月蠅い！ 話し掛けるな！」

奈瑠は振り向き様に怒鳴り、心を睨み付けた。

それに腹を立てた心は奈瑠に殴り掛かった。

すると白野威が現れ、心の顔を鋭く尖った爪で引っ搔いて去って

いった。

「いつてー!」

心は叫び、机に伏した。

「ざまあ見る、この暴力女め」

奈瑠はそう罵ると前を向いた。

(クソッ、いつか絶対殴ってやる)
心はそう心に誓うのであった。

第09話：和服少女（前書き）

和服少女が出る第9話。
「妹をお願いします。by・伊澄」

ヒナアフター

第09話：和服少女

白皇学院には、旧校舎に入っただけとはいけないと言う校則がある。しかし人間、禁止されているとつい行動を起こしたくなるものである。

そんな衝動に駆られた者　綾崎　心が一人、旧校舎の前に立っていた。

目の前に聳え立つ校舎からは、紫色の禍々しいオーラが放たれている。

心はそれに引き寄せられる様に歩き出し、扉に手を掛けた。

「一寸待て！」

とそこに現れたのは生徒会長の薫　雪ノ介。

「そこに入るな！」

雪ノ介がそう叫ぶと、心は振り向き様に訊ねた。

「どうしてだ？」

「校則で禁止されてるからだよ」

雪ノ介はそう言って生徒手帳を取り出し、校則が書かれたページを心に見せた。

そこには確かに旧校舎には立ち入らないようにしましょうと書かれている。

「それがどうした？」

心はそう言って扉を開けて中に入って閉めた。

「おい、入るなよ！」

と外から雪ノ介の叫び声。

「何か出て知らねえからな！」

雪ノ介はそう言って去っていった。

「何か出るって、何が出る　っ!？」

その時、心の目の前に人形の黒い影が現れた。

「な、何だお前!？」

心の叫ぶようなその問いに黒い影は振り向き問い返した。

「貴様、私が視えるのか？」

「視えなきゃ驚かねえよ！　つーかお前、ひよっとして幽霊か？」

「ふっ、よく解ったな。褒美に貴様の体を頂いてやるう」

そう言つて黒い影が心の体に入ろうとするが、しかし、心は咄嗟に避けて正宗を召喚し、黒い影を切り裂いた。

すると黒い影は「うわあああああ！」と悲鳴を上げて消滅した。

「ったく、何なんだこの校舎は？」

とその時、扉が開いて和服姿の少女が現れた。

身長は奈瑠と同じくらいである。

「あの、今すぐ此処から出て行って下さい」

と和服少女。

心は振り向き様に「どうして？」と訊ねる。

「それは、悪霊や妖怪などの危険なモノが居るからです」

「それってひよっとしてこんな奴？」

心はそう言つて先程倒した黒い影のイメージを頭上に出現させた。

「そうです。視たんですね？」

「ああ、視た。てかお前、誰？」

そう訊ねると和服少女が顔を顰める。

「人に名前を訊く前に先ずは自分から名乗って下さいませんか、綾

崎　心さん？」

「ああ、そうだったな……って、何で名乗ってもいねえのに私の姓名が判るんだよ！？」

「その木刀が教えてくれました」

和服少女はそう言つて正宗を指差した。

「お前、此奴と話せるのか？」

「ええ」

「そうか。で、お前の名は？」

「あ、申し遅れました。私は、鷺ノ宮ねのみや　夏澄です」

和服少女、鷺ノ宮　夏澄はそう言つて「宜しくお願いします」と

頭を下げた。

それに釣られて心も「こちらこそ宜しく願います」と頭を下げた。

「所で、綾崎さんはこんな所で何をなさっているんですか？」

と夏澄が頭を上げて訊ねる。

「校則に入るなどあったから入ってみたくなくて、それで入った」

「不良生徒？」

「かもな。てかお前こそ何しに来たんだ？」

「私はお仕事で来ました。あなたは先程、黒い影を視た、と仰いました。では、この校舎から禍々しいオーラが放たれてるのも視たと思います」

「ああ、確かにそんなの出てたな。けどそれがどうした？」

「この校舎、危険なんです。普通の人が入ったら、命は無いでしょ」
う

「ふうん。それはそうと、鷲ノ宮って言ったよな？」

「言いましたけど？」

「て事は、伊澄さんの知り合い？」

「妹です。お姉ちゃんをご存知なんですか？」

と首を傾げる夏澄。

「ああ、知ってる。偶に家に遊びに来る。それはそうと、伊澄さんに妹が居たのか。お前、お姉さんにそっくりで可愛いな。女の私でさえ心を奪われそうだ」

心はそう言っただけ頬を赤らめた。

「って、何を言ってるんだ私は!？」

と動揺して拳動不審に陥る心。

それを見ていた夏澄がクスクスと笑う。

「綾崎さんって面白い方ですね」

「笑うな！」

「すみません。それより、先刻の黒い影はどうしたんですか？」

「ああ、そいつなら正宗こいつで切り裂いた」

「お強いんですか？」

「まあそれなりに」

「そうですか。では貴方をお願いします。私を手伝って下さい！」

夏澄はそう言って土下座をした。

第09話：和服少女（後書き）

サーバ負荷により同じものが二つアップされた。

だからその内の一つを削除しようとしたら、二つとも消えてしまった。

そこで急遽書き直しますよ。

ああっ、もう最悪！ってな訳で次回に続きます。

第10話：心、召喚される（前書き）

異世界へ飛躍する第10話。
「お袋、私は暫く帰れません。b y・心」

ヒナアフター

第10話：心、召喚される

夏澄が土下座をしたのに対して心は顔を上げる様に言った。

「解った。そこまで言うなら手伝ってやる」

「本当ですか？」

と夏澄が顔を上げて訊ねる。

「ああ。で、何をすれば良い？」

「えっと、取り敢えず音楽室に行きましょう」

夏澄はそう言うのと立ち上がって歩き出した。その後ろを、心が付いて歩く。

バキッ！

突然、床が割れて心は落下した。

「大丈夫ですか！？」と夏澄が振り向き、穴の下を覗く。
すると直ぐに返事は来た。

「ああ、大丈夫だ。つーか、一階なのに何で落ちるんだよ？訳分かんねえよ」

「さあ」

と夏澄は肩を竦めた。

「まあ良いや。取り敢えず上がるそこ退いてくれ」

夏澄は「解りました」と頷いて下がった。

すると、穴から何かが飛び出してきて天井に当たって跳ね返り、床に着地した。その正体は心である。

「よし、そんじゃあ音楽室に」

そこまで言った所で、心は謎の光りに包まれた。

「ちよっ、何だこれ！？」

と彼女が驚いている間に、謎の光りは夏澄の前から消失してしま
った。

気が付くと、心は何処かの広い部屋に居た。

正面からは真空の刃が迫って来る。

心は咄嗟に正宗を構えると、迫り来る斬撃を弾き飛ばした。

「何処だ、此処？」

と辺りを見回す心。

「あー！」

心は此処が何処であるかと言う事に気付くとそう叫び「ナギさんの部屋だ！　しかし何故いきなりこんな所に？」と疑問符を頭に浮かべた。

「あなた、何者！？」

と声が聞こえた。

「え？」

心は声の方を向いた。その先には、ピンクの長髪に髪留めをした少女が立っていた。幼い頃のヒナギクだ。

「お袋？」

と心が首を傾げる。

ヒナギクは「は？」と目を丸くした。

「あの、君は一体？」

と後ろから声が聞こえた。振り返ると、そこには父親のハヤテが居た。

「パパ！」

心はそう叫び、正宗を放してハヤテに抱き付いた。

「え、パパ？」

ハヤテは首を傾げた。

「久しぶりだね、パパ」

「あ、あの、君は誰？」

「えっ、パパ、私の事忘れちゃったの！？　娘の心だよ！」

「知らないよ。て言うかそもそも僕に娘なんか居ないって」

心はその言葉に驚いた。

「何言ってるんだよパパ！　パパは綾崎　颯でしょ！？　私はその綾

崎 颯の娘の心だよ！」

ハヤテは訳が分からず頭が真っ白になった。

「あの、あなたは一体？」

と傍らに居た夏澄似の少女が心に訊ねる。

「ん？」

心が夏澄似の少女に向く。

「えっと、夏澄？」

「いえ、伊澄です」

「何だ、伊澄さんか。そっくりだから間違え……って、ええ！？」

心は驚いて飛び上がりそうになった。

「そんじゃあ此処は過去！？」

「否、多分、あなたから見れば異世界かと」

「異世界？」

「はい。あなたの事は、私が異世界から召喚しました」

「何か男の子が女の子の使い魔になるアレみたいだな」

「ヤマグチノボルが描いたアレですか？」

とハヤテ。

「そうそう、それぞれ！　つか、話し変わるけど、二人は何で戦ってんの？」

「ああ、それは　」

とハヤテが心に今ある状況の事を説明した。

「成る程。お袋の体からそいつを追い出せば良いんだな？　任せとけ」

心はそう言っつて自分の胸を叩くと、ヒナギクの方を向いた。

「正宗！」

心はそう叫んで手放した正宗を引き寄せて装備し、ヒナギクの背後に回り込んだ。

「はっ！」

と野球の打球フォームで正宗でヒナギクの腰を叩き、透過させて体内の何かを吹っ飛ばした。

同時にヒナギクの体が倒れた。

「ヒナギクさん！」

とハヤテが駆けてくる。

心は彼女をハヤテに任せると、先程吹っ飛ばした何かに近付いた。その何かは全身がメタルで出来ていた。

「貴様がアンゴル・モアか？」

謎のメタル生命体、アンゴル・モアは「その通りだ」と答えた。

「ノストラダムスの予言は本当だったか」

と心は正宗を振りかぶり、振り下ろし際に「まあそんな事より、貴様は私が潰す！」と言った。

アンゴル・モアは振り下ろされた正宗を全身の硬い体で弾き飛ばした。

「何っ！？」

心の手から正宗が離れ、宙を舞って床に突き刺さる。

「この野郎！」

心はアンゴル・モアを殴った。

ガンツ！ と鈍い金属音が鳴り、同時に心の拳に激痛。

（かてえ此奴！）

「俺の体はヒビイロノカネと言う金属物質で出来ている。この金属はこの地球で一番硬いと言われているダイヤモンドの刃でも傷は付
けられないぞ」

「何？」

「ふんっ」

アンゴル・モアが心の腹に拳を埋めずめる。

「がはっ！」

心は吐血し、吹っ飛んで壁にめり込んだ。

（仕方ない。こうなったら）

心は壁から抜け出すと、気を溜めた。

「はあああああああああ！」

金色のオーラを身に纏い、筋肉が膨張する心。

「3分で決める！」

心はそう叫ぶと、一瞬でアングル・モアの懐に移動し、顔面を殴り付けた。

アングル・モアは勢いよく吹っ飛ぶが、直ぐに体勢を直して心に接近。打ち合いが始まった。

(クソッ、強い！)

心は隙を見て距離を取り、正宗を引き寄せて掴み構えた。

「貴様と格闘しても埒が明かねえ。こいつで終わりにしてやる！」

心はそう言くと、傍らに落ちていた曝しの付いた大きな出刃包丁つばい物を拾って口に銜え、ヒナギクの下に落ちていた木刀を引き寄せて空いている手で握った。

(正宗!?)

とその木刀を見て感嘆する心。

(そんな事よりも)

心は出刃包丁つばいのを口に銜えたまま、

「三刀流、カマイタチスラッシュ！」

と叫んで駆け、三本の刀を振るい、アングル・モアの背後へ抜けた。

するとアングル・モアの体がバラバラになって八方に飛び散った。

「おのれ、よくも殺ってくれたな！」

その声と共に、アングル・モアの破片が一点に集まり出して一つになり、元の形に戻った。

「こうなったら貴様に乗ってやる！」

アングル・モアがそう言って心に跳び掛かると、彼女が言った。

「お前はもう、死んでいる」

「え？」

とアングル・モアが疑問符を浮かべた刹那、アングル・モアは爆裂霧散。爆風が発生し、傍らに居たハヤテ、ヒナギク、伊澄は吹っ飛ばされて壁にぶつかった。

「うわっ！」

「キヤツ！」

「痛いです」

と三人は壁からずり落ちて床に倒れた。が、ヒナギクが直ぐに立ち上がり、心に近付いた。

「一寸あなた」

「何だ？」

と銜えていた出刃包丁つばい物を口から離して振り向く心。

「何だ、じゃないわ。危ないじゃない！ 死んだらどうしてくれん
のよ！？」

ヒナギクはそう怒鳴りながら睨んだ。

「ごめん。あんなに強風だとは思わなくて」

ヒナギクは「はあ」と溜め息を吐いて肩を竦めた。

「まあ良いわ。三人とも無事だから。それはそうと、あなた私にそ
つくりね」

「そつくりなのは当然だよ。だって私、綾崎 颯と桂 雛菊の長女
だから」

「……え？」

ハヤテとヒナギクは目を点にした。

「どう言う事？ と訊ねる二人。」

「つまりこう言う事ではないでしょうか」

と伊澄が口を開き、二人が彼女の方を向いた。

「心さんの居た世界では、お二人が心さんの両親なのではないでし
ようか」

「ですよね？ と顔を心に向ける伊澄。」

心は素直に頷いた。

「私とハヤテくんが！？」

ヒナギクはハヤテの顔を見ると顔を真っ赤に染めた。

「……？」

ハヤテはそんなヒナギクを見て頭上に疑問符を浮かべた。

「所で伊澄さん」

「はい、何でしょう?」

「私は元の世界に帰れるの?」

その問いに伊澄はソツポを向いた。方法が無いらしい。

「どうなの?」

「……さあ?」

と肩を竦める伊澄。

「さあ、じゃねえよ! 帰れなきゃ困んだよ!」

「そんな事言われなくても、還す方法が判りません。すみませんけど、判るまでこの世界に居て下さい」

「そんなあ……」

心はその場に崩れて膝を床に着いた。

第10話：心、召喚される（後書き）

予告通りリンクさせてしまいました。

こっちは心視点であっちのとは微妙に違ってますが、内容は一緒です。

では次回

第11話：心VSアサシン執事（前書き）

初めて執事バトルをする第11話。
「爆乳は動きにくいぜ。by・心」

ヒナアフター

第11話：心VSアサシン執事

異世界に召喚されて一週間が経過した。心は今、桂家に居候している。

「お袋、腹減った」

土曜の夜、心はヒナギクのベッドの上から机で勉強しているヒナギクにそう言った。

ヒナギクは勉強を嫌々中断すると、立ち上がって部屋を出ていく。その後を心が付け、二人はリビンググに移動した。

ヒナギクは心の方を向き「何が食べたい？」と訊ねた。

「ハンバーグ」

「好きなの？」

「大好きだ」

「奇遇ね。私もなのよ」

そう言ってお台所へ入っていくヒナギク。

「遺伝だよ。生まれてきた時にお袋の好物が受け継がれたんだ」

「そう。て言うか、そのお袋っての辞めてくれない？何か老けたみたいで嫌よ」

「じゃあ何て呼べば良いんだ。ママか、ママと呼んで欲しいのか？」

「ヒナギクと呼びなさい」

「それは無理。自分の母親を名前で呼ぶのは抵抗ある」

「じゃあ呼びやすいので」

「オツケー。解ったよ、俎板さん」

その途端、ヒナギクの堪忍袋の緒がブチッと切れた。

ヒナギクは心を睨むと「あなたには言われたくないわよ！」と言って彼女の胸元を指差した。

「あんだだっで俎板でしょ!？」

「否、私は締めてるだけだ」

そう言っで心は服を脱いで胸元を示した。そこには曝しが巻かれ

ていた。

「外しなさい」

ヒナギクにそう言われ心は外した。

するとポインツと音が鳴ったのと同時に胸が膨らんだ。そのサイズは驚く程に大きい。巨乳……否、爆乳と言った所か。

それを見たヒナギクは床に膝を着き「負けた……」と酷くやつれた顔で呟いた。

「ねえ、どうしたらそんなに大きくなるのか教えて」

「大きくしたいのか？」

ヒナギクは「うん」と力強く頷いた。

「揉んで貰え」

その言葉に、ヒナギクはある妄想を。

それは、自分がハヤテに胸を揉まれている所だった。

ヒナギクはカアツと赤くなる慌てて妄想を中断した。

「駄目よ！ 無理よ！ そんなのさせられないわ！」

「誰にやられてたんだよ？」

「は、ハヤテくん……」

「好きなのか？」

「……うん、好き」

「コクれば？」

「それは拒否するわ」

「どうして？」

「負けた気がするからよ」

「……」

「私はね、告白するよりされるのが良いの。それに、ハヤテくんが私の事どう思ってるかなんて判んないし」

「ようし。それじゃあパパの気持を私が確かめてやるう」

心はそう言いながら胸元に曝しを巻き服を着た。

「どうやって？」

「お袋に化けてパパと一日デートをする。その間にあの人の気持を

探るのさ」

心はそう言っつて携帯電話を取り出した。

「所で、番号解る？」

「え？ああ、番号ね」

ヒナギクは携帯を取り出して電話帳からハヤテの携帯番号を呼び出して心に見せた。

心は番号を打ち込むと発信した。

ブルルルルルル　と呼び出し音が鳴り、ハヤテが応答した。

「はい、ハヤテです」

「あ、ハヤテくん。私、ヒナギクだけど」

と声を高くしてヒナギクヴォイスを出す心。

「あのね、明日の日曜日なんだけど、時間あるかしら？」

「空けようと思えば空けられますが？」

「そう。じゃあ明日のお昼に負け犬公園で待つてるわ」

そう言っつて心は電話を切っつて仕舞った。

日曜の正午。髪をピンクに染め髪留めを付けた心は負け犬公園でハヤテを待つていた。

「お待たせしました、ヒナギクさん」

とそこにハヤテが現れた。

心はハヤテの方を向き「私も今来た所よ」と答えた。

「それじゃ行きましようか」

「はい。所でどちらに行くんですか？」

その問いに心はポケットからチケットを2枚取り出した。舞浜にある遊園地のである。

「あの、これってひよっとして」

「デート。少しは喜びなさいよ？　折角の女の子からのお誘いなんだから」

「でしたら辞めておきます」

「は？」

心は何故と言いたげな顔をした。

「お嬢様にバシたら怒られる気がするのよ」

「ふうん。ハヤテくんは私とデートするのがそんなに嫌なの？」

そう言っつて心は顔を顰めた。

「べ、別にそう言っつ意味で言っつた訳じゃあ・・・」

「じゃあどう言っつ意味？」

と心は間合いを詰めるが、しかし、ハヤテは答えられなかった。

心はハヤテの胸倉を掴んでグイッと引き寄せた。

「早く本当の事言いなさい。怒らないから」

「ほ、本当に怒りませんか？」

「うん、怒らないわ」

と心は笑顔で言っつてみせた。

「では言いますけど、ヒナギクさんって何かあると直ぐ怒るじゃないですか。だから一緒に居るのは嫌なんですよ」

ハヤテがそう言っつと、心の拳が顔面にめり込んだ。

「おぶっ!?!」

「殴られたい訳？」

「殴っつてから言わないで下さい」

「はあ」

心は溜め息を吐きながら肩を竦めた。

「帰る」

そう言っつて心は桂家に向かっつて歩き出した。

(拙い、ヒナギクさんを怒らせてしまった。仕方が無い。此処は巧く機嫌を取っつて……)

ハヤテはそう思っつと、後を追っつて掛っつて肩を掴んだ。

「ヒナギクさん、やっぱり行きます。遊園地」

とその時、二人の足下に手裏剣が飛来。地面に突き刺さった。

二人は感嘆の表情を浮かべると、手裏剣が飛んで来た方を向いた。その先には時計があり、その上に忍者の格好をした人物が立っつてい

た。

忍者？ と二人は首を傾げた。

何と無く忍者っぽい奴は「私はアサシン執事。綾崎 颯、貴様の命は貰った」と言つて飛び降り、着地に失敗して転ぶ。

その時二人はこう思った。間抜けだなあ、と。

すると自称アサシン執事が立ち上がり叫ぶ。

「お前ら今、間抜けだとか思つただろ!?」

その問いに二人は首を横に振るつた。

「ふんっ、まあ良い。勝負だ、綾崎 颯!」

自称アサシン執事がそう言つと、そいつの前にく今週の執事バトル!>と言うテロップが現れた。

「一寸待つた!」

心が叫び、テロップを退かして別のテロップを表示させた。<アサシン執事の死に様>と言うテロップだ。

「な、何故私が死なねばならんだ!?」

「何と無く」

「理由も無く表示させんな!」

アサシン執事はそう叫んでテロップを退かした。

「そんじゃあ綾崎 颯!覚悟しやがれ!」

とハヤテに襲い掛かるアサシン執事。だが、心が素早く足払いを掛けてそいつを倒した。

ドテッ! と腹這いになるアサシン執事。

「貴様、私の邪魔をしようのか!?」

アサシン執事は立ち上がり心を睨んだ。

「する」

「そうか。なら先に貴様の命を貰おう!」

アサシン執事は懐から小太刀を取り出して攻撃を開始した。しかし、軽やかに回避され、攻撃は全て空を切る。

「鈍いな、お前」

とその時、小太刀の刃が心の胸元に触れ、服と一緒に曝しが引き

裂かれた。

ポインツと膨らむ爆乳。

心は顔を真っ赤に染めると、「てめえよくも！」とアサシン執事に足払いを掛けて直ぐに宙へ蹴り上げ、連続キックを156、804、000回お見舞いして跳び上がり、前転して踵で叩き落とし着地した。

アサシン執事はボロボロになって気絶していた。

一方ハヤテは心の爆乳を見て鼻血を垂らしている。

「あ、あの、ヒナギクさんってポインでしたっけ!？」

「見るなあ!」

心はハヤテの懐に一瞬で駆け、アッパーカットを繰り出した。

ハヤテは「うわああああああ!」と悲鳴を上げて遙か彼方へ飛んで行った。

「あっ!」

と心はその場で固まった。

第11話：心VSアサシン執事（後書き）

ネタが尽きた。そろそろ現代にでも戻そうか。それとも……。

ヒナアフター

第12話：ヒナギクのお迎え

練馬に広大な敷地を持つ小中高一貫式の白皇学院。エスカレーター心は現在、此処に籍を入れて通っている。最初は潮見に籍を置くつもりだったが、ヒナギクがそれをさせなかった。

そんな心が朝、ヒナギクと一緒に校門に來ると、小学生くらいの黄色いツインテール少女を連れたハヤテと出会った。

「おはよう御座います、ヒナギクさん」ハヤテが微笑みながらそう挨拶した。

「おはよう、ハヤテくん」とヒナギクも微笑みながら挨拶を交わす。そのついでに「ナギもおはよう」と少女の方を向いて言う。

「ヒナギク、”も”とは何だ、”も”とは？ 人をおまけみたいに言うな」

ゴチン！

突如、少女の頭に拳骨が飛來した。

「ヒナギクさんだ。年上を呼び捨てすんじゃねえよチビ」

そう言ったのは心である。チビは頭のたんこぶを押さえながら涙を流して彼女を見上げた。

「誰だ貴様！？」

「何故お前に教えにやならんのだ？ つーか人に名を訊く時は先ず自分から名乗るもんだろ。常識だ。そんな事も出来ないのか、お前は？」

少女は心を睨みながら「三千院さんせんいん 凧だ」と答えた。

「そうか。私はあや」

そう言い掛けた所で、ヒナギクが耳を引っ張って囁いた。

「（綾崎は拙いわよ。桂にしなさい）」

「（どうして？）」

「（問答無用。解った？）」

「ちっ」

心は舌打ちをするとナギの方を見た。

「桂 心だ」

「桂？ ヒナギクと同じ姓ではないか」

そこでまたヒナギクが心の耳を引っ張る。

「（双子って事でお願ひ）」

「（何で？）」

「（良いから言う通りにしなさい）」

「（しゃーねーな）」

心はナギに向き直った。

「実は私たち、双子なんだ」

「そうなのか？」

とナギがヒナギクを見る。

「一寸待って下さい」とハヤテ。

「どうした？」

ナギがハヤテを見る。

「その人、あや」

そう言い掛けた所でヒナギクが慌ててハヤテの口を塞いで顔を近づけた。

顔面にはくお願ひ、空気読んで>と書いてある。

ハヤテは頷くと「な、何でもありません、お嬢様」と言った。

「何だ、おかしな奴だな。それより行くぞ、ハヤテ」

ナギはそう言って校門を潜って行った。

「ふう」と安堵の溜め息を吐くヒナギク。

「あの、ヒナギクさん。どうして偽名なんです？」

「ナギの前で私たちの娘だって言える？」

ハヤテは少し考えて「無理です」と答えた。

「でしょ？ 解ったら私に合わせて」

「解りました」

「おーい、ハヤテー！」

とナギが校門の向こうで叫んだ。

「それじゃあ先に行ってます」

ハヤテはそう言っていると慌てて校門を潜って行った。

ヒナギクは心の方を向くと言った。

「心、あなたはこれから白皇に居る間は娘じゃなくて双子の妹だからね」

「妹？」

「妹じゃ不満かしら？」

「不満……かな」

「あなた、誕生日いつよ？」

「11月11日」

「歳は？」

「16。次の誕生日で17」

ヒナギクはドーンと音を立てて四つん這いになった。

「敗けたわ」

「何が？」

「歳よ。私は3月3日生まれ。どう見てもあなたのが先よ」

「はいはい。けど、生まれた年は違う。お袋は平成元年、私は平成

22年」

「だからお袋は辞めてって言ってるでしょ？」

「姐板」

「殴るわよ？」

「殴れるもんならな」

心がそう言っていると、ヒナギクが立ち上がって拳を放ったが、しかし、攻撃は既の所でかわされ空を切った。

「遊んでないで行くぞ」と心は校門を潜る。

「ちよっ、待ちなさいよ！」と後を追い掛けるヒナギク。

「嫌なこった」と走り出す心だが……。

ズザー！

何者かに足払いを掛けられ躓いて転び地面を滑った。

「おっと悪い。つい足が滑っちゃまったぜ」

「何すんだてめえ!？」

心は立ち上がり様に声の主に振り向いた。その先には正太郎に似た少年が立っていた。

「正太郎？」と疑問符を浮かべる心。

「僕は東宮^{あづみや} 康太郎だ。正太郎なんて知らないな。つーかお前誰だ？桂さんみたいな格好しやがって」

その言葉にヒナギクが答える。

「私の双子の姉よ」

康太郎は振り向き「あ、桂さん。え、双子？」と二人を交互に見る。二人はほぼ同時に頷いてみせた。

「桂さんって双子だったの？」

と疑問の表情を浮かべる康太郎に二人は再度頷く。

康太郎は心に近付くと、申し訳なさそうな顔で「先刻はゴメン」と言った。

「ゴメンで済むかつーの」

心はそう言って手の平を見せた。

血だらけになっていた。

「あら、怪我したの？ それじゃあ手当しないとね」

ヒナギクはそう言って懐からマキンを取り出した。

心はそれを見ると恐怖で鳥肌を立てた。

「い、良い……」

「何言ってるのよ。ちゃんと消毒しないと黴菌入るわよ」

「だから良いって言うてるだろ」

心はそう言って去ろうとするが、咄嗟にヒナギクに腕を掴まれてしまった。

「何で逃げるのよ？」

「放して！」

心はヒナギクの腕を振り払って駆け出した。

「待ちなさい！」と後を追うヒナギク。

「うわっ、来んなよ！」

「そうはいかないわよ!」

「誰か私を助けてー!」

心は涙目になりながらそう叫んだ。

するとどこからともなく、と言うか茂みからクラウスが現れヒナギクの前に立ちはだかった。

「まあ待ちたまえ」

クラウスさん と立ち止まるヒナギク。

「って、何か以前より老けてない?」

「む……それは気のせいだ」

それよりも とクラウスは心の方を向いた。その先では彼女が呆気にとられて佇んでいる。

「何で……どうしてクラウスさんが居んの?」

「それは迎えに来たからに決まっているだろう。お母さんも一緒だ」
クラウスがそう言うのと、背後でヒナギクが倒れた。

「お袋!?!」

心は慌てて駆け寄った。

「しっかりしろ、お袋!」としやがんで仰向けにして抱き起こす。

するとヒナギクは薄目を開けた。

「迎えに来たわよ、心」

「は?」

心は目を点にした。

「迎えに来たって言ったのよ。全く、親に心配掛けさせちゃ駄目じゃない」

「あの、言ってる事がよく……」

「あ、そうだったわね。説明するわ。実はね」

とヒナギクは話しを始めた。

それは、心が元居た世界での出来事である。

彼女が消えた後、夏澄がその場で霊視をし、空間に異世界へ通じる穴を見付けた。その後、夏澄は綾崎家を探してそこに向かい、白皇の旧校舎で遭った事をヒナギクに伝えた。ヒナギクは心のバイト

先である三千院家にその事を連絡し、クラウドと共にこちらの世界にやって来たのだ。最初は、クラウドでは無く、マリアと行く予定だったが、クラウドが『私が行く』と駄々をこねた為、結局マリアが残る事になったのだ。

「　　と言っ訳なのよ」

「へえ。けど何でその体なの？」

「それは精神だけこつちに来たから。同じ人物が二人も居ちゃやっこしいでしょ？」

「確かに」

「だから夏澄ちゃんに頼んで精神だけを送って貰ったのよ。そしてらこつちの世界に居る私の体に入っちゃったって訳。まあそう言う訳だから、これから旧校舎に行くわよ」

「旧校舎？どうして」

「元の世界に帰る道がそこに在るからよ」

「マジで？それじゃあ早く行こう！」

心はヒナギクを放すとすっと立ち上がって旧校舎に向かった。

第13話：お兄ちゃんとの再会

旧校舎の一角に、異次元へのゲートがある。二人はそこにやってくると、立ち止まった。

「なあ、これって……」

心が漆黒に染まる丸い穴を指差した。

「そう、これが元の世界に通じる穴よ。じゃあ、私は先に戻ってるわね」

ヒナギクはそう言うと、肉体を脱ぎ捨てて穴に飛び込んだ。

「ごくつと唾を飲み込み、徐に手を近付ける心。」

「お待ち下さい　っ！」

その声と共に現れたのは、アサシン執事だった。

「なっ、お前は！」

心は正宗を掴み、構えた。

「待って下さい。貴方と戦うつもりはありません」

その言葉に心は正宗を仕舞う。

「どう言う事だ？」

アサシン執事は跪いて答える。

「私もお供します」

疑問符を浮かべる心。

「実はですね、貴方の強さに惚れてしましまして、それで舎弟にでもなるうかと思ひまして」

「舎弟か。別に構わないが」

「では、お供させてくれると？」

「ああ」

「有り難う御座います！ 所で、お名前を伺って宜しいでしょうか？」

「綾崎　心だ」

心はそう残して穴に飛び込んだ。

「お待ちを！」
アサシン執事も後に続いた。

元の世界では、ヒナギクが穴をジツと見つめていた。

「夏澄ちゃん、心が出て来るまでどのくらいかしら？」

「判りません。このゲートは本来、霊体を通る道ですから、生身の人間が通るとどのくらい掛かるのか……」

と、その時、穴の中から心とアサシン執事が飛び出して来た。

ゴンッ！

心とヒナギクは頭をこつつんこしてしまった。

「「痛っ！」」

同時に頭を押さえる二人。

「危ないじゃない！ いきなり飛び出して来ないで！」

ヒナギクは目に涙を浮かべながら怒鳴った。

「仕方が無かったんだよ。穴に飛び込んだら後ろから道が崩れ始めるから慌てて此処まで走って来たんだ」

「そして私の頭に突っ込んだ、と」

所で とアサシン執事を見るヒナギク。

「こいつか？ こいつは私の舎弟だ」

心はアサシン執事を指差しながら答えた。

「舎弟って、貴方また暴力振るって言うなりに？」

「違うよ。此奴はアサシン執事と言って、あっちの世界のパパを狙ってたんだけど、私が軽く叩いてやったんだ。そしたら、私の舎弟になりたいと」

「そう。それより、貴方に逢いたいって人が居るんだけど」

そう言っつてヒナギクは、葉書を取り出して心に渡す。それにはこう書かれている。

綾崎 心さん、その節は助けて頂き、感謝致します。今度、お礼を致しますので、私のお家まで是非遊びにいらして下さい。

「……………?」

心は疑問符を浮かべながら首を傾げた。

(何かお礼されるような事したか?)

心は過去の記憶を呼び起こした。

*

1年前の事だ。当時、心は潮見高校の1年生だった。

その日の夜、心は暇潰しに町中を徘徊していた。

(何か面白い事無いか)

そう思っていると、偶々通り掛かった空き地の片隅で三十路前後の女性が、人間では無い何者かに襲われているのが見えた。

何者かは逃げ場を失って脅える女性に言った。

「お前の体を寄越せ」

「何なんですか、貴方?」

やばい! そう思った心は、咄嗟に駆け出し、何者かに飛び蹴りを放った。

「うっ!」

何者かは呻くと共に吹っ飛んで塀にぶつかってズルズルと地面に落ちた。

「くっ……………何者だ?」

何者かは立ち上がり、心を見て訊ねた。

「下がってる」

心は女性を自分の背後に移動させた。

「貴様、宇宙人か?」

「邪魔するな! 俺はそいつの体を頂くのだ!」

何者かはそう叫ぶと、心に気弾を放った。

心は攻撃を喰らい、後ろに吹っ飛びそうになったが、何とか堪え

た。

「ほう、俺の技を喰らっても立っているとは対した奴だ」

「何者だ、お前」

「俺か？ 俺はチエンジャー星から来たギニユラス様だ」

「チエンジャー星人？」

「知らないな と首を傾げる心。」

「そうか。て言うかそこを退け」

「それは却下。何が目的かは知らんが、この女性には指一本触れさせねえ」

「そうか、邪魔をするのか。ならば貴様を殺してからにしようか」

「何者か、ギニユラスはそう言つと、心に接近して先制攻撃。だが、心はヒョイと避けてカウンターをお見舞い。」

「がはっ！」

ギニユラスは腹を押さえ蹲すくつた。

「つ………強いな貴様。後ろの奴より遥かに高い戦闘力だ」

「鍛えてるからな」

心が答えると、ギニユラスが何かを企んでいるかの様な笑みを浮かべた。

「……………」

警戒する心。

「気に入ったぞ、その体 っ！」

「……………」

心が疑問符を浮かべると同時に、ギニユラスが両手を横に広げた。

そして、

「チエンジ ツ！」

その叫び声と共に、ギニユラスは妙な色の細い光線を口から放つ。

（やべ、動けねえ）

それは単純に、後ろに女性が居るから避けられない、と言う訳ではない。丸で金縛りに遭ったかの様に体が動かないのだ。

（くそっ、動け！）

焦る心。その間にも、妙な色の細い光線は迫る。

(んっ!?)

光線を喰らったと同時に、体内に何かが入り込んだ。そして強い力によって体外へと押し出された心の魂は向かい側のギニユラスの体に重なる。

「ちよっ、何だよこれ!？」

驚き戸惑うギニユラス。

心はクククと笑い、

「交換させて貰ったぞ、貴様の体と　っ!」

「なっ!？」

信じられない事だった。人間の体が他の奴と入れ代わるのは。

「どうやら驚いている様だな」

「私の体を返せ」

「断る。返して欲しければお前より強い体の持ち主を連れて来い」

「はぁ……」

ギニユラスはその言葉に溜め息を吐いて言った。

「それはお前の体じゃないか」

「どう言う事だ？」

と心は怪訝そうな顔をする。

「それは……こう言う事だ　っ!」

ギニユラスはそう言うのと、目にも留まらぬ速度で心の背後に移動し、回し蹴りを放った。しかし、相手は吹っ飛ばず、平気な顔をしていた。

「ふっ、耐久性も優れているな」

心はそう言ってニヤリと笑うと、振り返ってギニユラスの鳩尾に拳を埋めずめた。

「がはっ!」

吐血するギニユラス。

「凄い威力だ。軽く突いただけで怯むとは」

心はそう口にするのと、ギニユラスの鳩尾から拳を抜いた。

(くっ……自分にやられるなんて、情けねえ……！)

「さて、そろそろ殺してや」

心がそこまで言い掛けた所で、何処からともなく二足の下駄が飛来し、ゴスツと額に直撃した。

「誰だ!?」と、心は下駄が飛んで来た方を見た。それに釣られ、ギニユラスも振り向く。その先には、心と瓜二つの人物が居た。

「お兄ちゃん！」

ギニユラスはそう叫ぶと、そのお兄ちゃんに駆け寄って抱き付いた。戸惑うお兄ちゃん。

「逢いたかったよ、お兄ちゃん」

「放せ」

お兄ちゃんはギニユラスの締め付けから脱出した。

「心、それはアイツから体を取り返してからだ」

お兄ちゃんはそう言つと、心の方へ足を進めた。一步一步、確実に近付いていく。

「何だ貴様は？」

その問いにお兄ちゃんは答える。

「知る必要は無い。お前は元の体に戻って死ぬのだからな」

「何だと？」

「聴こえなかつたか？ お前は死ぬんだよ」

お兄ちゃんはそう言つと、デコピンで心を吹っ飛ばした。

「うわああああああ　っ！」

悲鳴を上げながら土管へと突っ込んで破壊する心。

心は立ち上がり様にニヤリと笑う。

「強い体……気に入った　っ！」

心はそう言つと、「チエーンジ　っ！」と例の光線を放った。

(しめた！)

咄嗟の判断で光線に駆けるギニユラス。

光線を受け、ギニユラスの体に何かが入り込み、同時に強い力で心の魂が外に押し出され、元の肉体に重なった。

「よっしやあ！ 体が戻ればこっちのもんよ！」

心は叫ぶと、お兄ちゃんと共にギニユラスに飛び蹴りを放った。

「辞めろ つ！」

ギニユラスは叫ぶが、しかし、二人の攻撃はもう止まらない。ギニユラスはダブル飛び蹴りを見事に喰らい、爆裂霧散した。

「お兄ちゃん」

心は着地すると直ぐ様お兄ちゃんへダイブが、しかし、お兄ちゃんにひらりとかわされ、地面に突っ込んだ。

「……………」

睨め付ける心。

「悪い。つい反射的に避けてしまった」

お兄ちゃんは申し訳無さそうな顔でそう言った。

「まあまあ、睨むなよ」

しかし、心の表情は変わらぬままだ。

「あ…………俺、急用思い出したから帰るわ。母さんに宜しく伝えておいてくれ。じゃあな」

お兄ちゃんはそう言うと、攻撃用に使った下駄を履いて去っていった。

「あの…………」

女性が心に声を掛けた。心は「何だ？」と顔を向ける。

「助けて頂いて有り難うですわ。今度、お礼させて頂きたいので連絡先を教えて頂けますこと？」

「いや、お礼なんて要らない。気持で十分だ」

心はそう言うと、立ち上がって女性の前から去っていく。

「お待ち下さい！」

立ち止まり、振り返る心。

「出来れば、お名前だけでも！」

「綾崎 心」

そう名乗り、去っていく。

「私は天王州てんのうす アテネで御座いますわ！ いつか、必ず貴方にお礼

を！」

女性は心の小さなその背中に向かって叫んだ。

*

「思い出した」

1年前の記憶が脳裏に過った心は、そう呟いた。

「……………」

ヒナギクはそれに疑問符を浮かべる。

「お袋、私行ってくる」

「へ？」

心は去っていった。

「ちょっと待ちなさいよ！」

ヒナギクは叫んだが、しかし、もう聞こえない所に心は居た。

「はあ……………」

ヒナギクは溜め息を吐いて肩を竦めた。

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7919d/>

ヒナアフター

2008年11月7日09時03分発行